



～原告7メッセージ～

追加提訴について

原告7：事故当時小6・中通り出身・現在20代・首都圏在住）手術（片葉切除）

私は昨年、2021年の夏に甲状腺がんを診断を受けました。

医師から「悪性で大きさも1cm以上あるから私たちは手術を勧めなければなりません。」と言われました。

私は原発事故が起きてからずっと、福島県が実施している甲状腺県民健康調査を毎回受けていました。これまでの3回は、毎回、「貴方は健康です。何も心配ありません。」と言われていて安心しきっていた分、ショックでした。

医師から、「手術を後回しにすれば再発や転移などの確率は上がる」という話もあり、「早く手術をして終わりにしたい」と思い、手術を受けました。心のどこかで自分は多少の苦痛には耐えられると思っていました。

しかし、手術後は予想以上に辛く、心身ともに疲れきって、しまいには家族に当たるといふ最悪なことをしてしまいました。

今の状況を受け入れることが出来なくて、自分の殻に閉じこもる生活をしている中、父から311子ども甲状腺がん裁判があることを聞きました。

「自分以外にも苦しい思いをしてる人達がいるんだ」と知り、話を聞きたいと思ったので、父から連絡をとってもらいました。

実際、話を聞いて「自分が甲状腺がんになってしまったのは何故か」しっかりと向き合いたいと思い、参加を決意しました。

私は普段、「笑っていればなんとかなる」という考えなので、明るく喋ってなんともない雰囲気を出していますが、心の中は不安だらけです。

無意識でしたが「放射能のことは、自分とは関係の無いことだ。自分は病気になんかならない」と思っており、自分が甲状腺がんを診断を受けるまで何もしてきませんでした。でも、10年経って甲状腺がんになりました。

10年後、20年後、もしかすると30年後に同じことが繰り返されるのではないかといつも考えています。もしそうなったら、あの辛かった手術に耐えられないと思います。

でもいつまでも不安を抱いたところで何も変わりません。病気になってしまったのは仕方ないと諦めたくはありません。

どんな結果になろうとも原告として最後までやる覚悟を持ってこの裁判に挑みます。

以上